

2025年度 一般選抜問題
前期B日程 2025年1月26日(日)

選 択 科 目

(数学・基礎理科・物理・化学・生物・日本史・世界史・国語)

数 学	1～ 6ページ
基礎理科	7～ 26ページ
※2科目選択して1科目の扱いとなります。	
物 理	27～ 39ページ
化 学	41～ 54ページ
生 物	55～ 67ページ
日 本 史	69～ 80ページ
世 界 史	81～ 95ページ
国 語	97～112ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記の科目から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目を選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**基礎理科**」(赤色)と「**数学・基礎理科以外**」(赤色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。数学以外の科目については、解答する科目を選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合は0点となります。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。「**基礎理科**」の解答用紙は2科目を選択し、科目ごとに決められた解答欄にマークしてください。3科目に解答した場合は0点となります。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い（問1～4）に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 生活ヒツジユ品を購入する。 1

① 師が弟子に技の秘訣ひけをデンジユする。

② 祖父がテンジユをまつとうする。

③ 天然ジユシを使用した製品を販売する。

④ 本邦のグンジユ産業の歴史を振り返る。

イ タクエツした才能を誇るピアニスト。 2

① 温泉につかり、命のセンタクをする。

② 家族そろってシヨクタクを囲む。

③ コウタクのある布で衣装を作る。

④ 全会一致で法案がサイタクされた。

ウ 問題のチクジ解決を図る。 3

① 一部のメンバーが組織からホウチクされる。

② データをもとに新たな理論をコウチクする。

③ なかなか休めないため疲労がチクセキする。

④ カチクの排泄物はいせつぶつによる環境問題を調査する。

エ 正体不明の病気をハッシヨウする。 4

① 窓ガラスを割ってしまい、ベンシヨウする。

② 腰痛のシヨウジヨウがやわらぐ。

③ 彼女は他の国とのコウシヨウに優れた外交官だ。

④ 二社間での取引のセッシヨウは決裂に終わった。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 一目 5 然

① 良 ② 了 ③ 瞭 ④ 療

イ 臨 6 応変

① 期 ② 記 ③ 季 ④ 機

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、後の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 苦 7 をなめる

イ 不 8 を買う

ウ 一 9 を担う

① 敗 ② 況 ③ 躍 ④ 翼 ⑤ 杯

⑥ 協 ⑦ 洪 ⑧ 興 ⑨ 境

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

10、11、12

ア 徳永直の著作 10

① 『蟹工船』 ② 『太陽のない街』

③ 『ギヤラメル工場から』 ④ 『セメント樽の中の手紙』

イ 多和田葉子の著作 11

① 『犬婿入り』 ② 『海峡の光』 ③ 『花腐し』 ④ 『蹴りたい背中』

ウ 白樺派であり「小説の神様」と呼ばれる作家 12

① 里見弴 ② 木下利玄 ③ 志賀直哉 ④ 有島武郎

2 次の〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

私達が通常〈正しいこと〉と理解している事柄は、最低限、法を守り、これに違反しないことであると言えることができる。この法秩序が守られているとき、共同体の秩序と調和は保たれる。そして、この共同体の秩序と調和こそ、〈正義〉の意味に他ならない。(Ⅰ) 私達が法を介して正しい行ないと理解しているものは、無意識のうちに、この秩序と調和を目指している。法が正義の番人だと言われるのは、このためである。これは、個が全体のためになるということによって、共同体の秩序、つまり正義をつくりだそうとする面だと言えよう。

しかし、正義は、こういう面ばかりでなく、逆にまた、全体が個のためになるということによっても実現されなければならない。(Ⅱ) この面は、むしろ統治の任に当たる者の方に要求される正義である。つまり、統治者は、いつも被統治者のために国家全体に配慮を巡らし、国家に平和と安全と秩序をもたらさねばならないのである。これが統治者の守護すべき正義である。

とすれば、正義とは、共同体の論理からすれば、また〈全体は個のために、個は全体のために〉という^A全体と個の相互の自己否定関係だとも規定することができる。それが、共同体の秩序と調和の論理的表現だからである。実際、現実の法も、この両方を規定している。消極的な面では、国民に対して、種々の人倫に反したこと、例えば殺人や窃盗や詐欺や暴行などを禁じ、これに違反したときには、権力によって処罰することができるとしており、また、公務に当たる者には、権力の濫用や汚職を禁じている。積極的な面では、国民に対して、納税の義務や祖国防衛の義務や勤労の義務などを定めているとともに、同時に、自由と平等を求め、教育を受け、財産を保障され、幸福を追求する権利も定めている。この後の方は、むしろ、統治者の方が被統治者の方に奉仕しなければならない義務なのである。どれも、全体は個のために、個は全体のためになるのでなければならぬことを規定していると言えよう。権利と義務が、対立しながらも同時に相補って、はじめて秩序ある公共体が成立するのも、このことからくる。(Ⅲ)

プラトンは、『国家』第一巻で、正義とは何かということについて論じ、正義についての様々な考えを吟味している。そこで最も強力な批判の対象となるものは、トラシマコスの考えであった。トラシマコスは、あれこれの正義論に業を煮やした^{あやぐ}挙句、いきなり〈正義とは強者の利益にすぎない〉という考えを提出する。つまり、何が正義であるかということは、力をもった支配者が決めて、それを法として定めるのであって、それはいつも支配者の利益を目指していると言う。だから、そのような正義を真正直^{まっしうじ}に守って、支配者に利用される者は、お人好^{おひとよし}だということになる。それに対して、プラトンは、医者は患者の利益のために働き、船長は船乗りの利益のために働くように、支配者も被支配者の利益のために働くのであって、それが本来の厳密な意味での正義の意味だと言って論駁^{ろんぱく}している。これは、ある意味で、現実論と理想論との対立とも理解することができるが、いずれにしても、ここには、少なくとも、統治者が守るべき正義がどの辺にあるかが、示唆されているとは言えるであろう。(Ⅳ)

プラトンは、その後、正義の問題を個々の人間において考えるのではなく、もっと大きな生きもの、つまり国家において考えてみようではないかと提案し、長い^う紆余曲折を経た議論の結果、第四巻で再び正義の問題に立ち帰り、次のような考えを提出する。すなわち、正義とは、国家の欲望的部分を理性的部分が抑制し、かくて全体としての調和をもたらすことであり、この秩序の中で、各人が、その持分において、それぞれの身分に配分された節制、勇氣、智慧などの徳を發揮できるように、統治者

が配慮を巡らし、こうして全体としての徳を実現することだ、という考えが提出される。^Bこのプラトンの定義した正義についての考えは、全体と個の均衡によって共同体の調和と秩序をつくり出すという正義についての考えと共通している。支配者が被支配者の利益のためにあるということが正義だと言われたのも、それがあって、はじめて全体の調和がもたらされるからである。

なるほど、〈正義とは強者の利益にすぎない〉というトラシユマコス^Cの考えは、歴史の現実論としては、ある一面を突いた考えだとも言えよう。マルクスやエンゲルスが、歴史形成の最重要な要因として、経済的・物質的構造における矛盾対立をあげ、法律とか政治制度、いわゆる上部構造は、この下部構造を正当化するイデオロギーによって防衛されると考え、かくて国家は階級的搾取の手段であり、被支配階級の抑圧機関にすぎず、とりわけ、近代国家のイデオロギーは、資本家による賃労働の搾取を正当化する道具であると考えたのも、このトラシユマコスの考えに近いと言えるであろう。

確かに、宗教的イデオロギーにしても、自由主義や民主主義のイデオロギーにしても、国家主義や共産主義のイデオロギーにしても、支配者は、そのときの最も権威ある神聖な神話によって自己を防衛し、自らの支配を正当づけ、そして自らの利益をはかるうとする。このことは、支配者にとどまらず、一般の民衆においても同じであって、自己の利益のためには、どんなイデオロギーでも、その時代に正義とされている権威あるイデオロギーによって武装する。(中略)いつもそういう神聖な正義の陰に身を寄せて、自己を守ろうとするものである。

しかし、このような考えは、プラトンの言うように、^Cものごとの本来的定義と現実とを混同するものであつて、いかなるイデオロギーも、本来は、そのような自己の利益をはかるためのものではなかつたであろう。いかなるイデオロギーにも、そこにはいつも、古くから変^{かわ}らない法や正義の観念が含まれており、その観念は万人普遍のものである。それは、時代や階級の違いを超えて成り立つ普遍的なものであつて、どんな国家形態にあつても、それは、国家共同体を秩序と調和のある共同体として成立させることを求めている。自然法というものが、どのような形態の国家の法にも盛り込まれているのはそのためである。とすれば、法や正義は、やはり、この共同体をいかに成り立たせるかという理性的工夫から出てきているのであつて、それは、支配者の利益をはかるためだけのものではないと言わねばならない。(V)正義とか法は、どこまでも共同体の正義、法として理解されねばならないのである。だからこそ、実際、現実にも、いつの時代にあつても、正義なき支配者が法を無視して人民の利益をないがしろにし、横暴を極めれば、革命や暴動によって打ち倒されたのである。その支配者打倒の力になったものは、統治者は被統治者のために、全体は個のためなのでなければならぬという普遍的に変らない正義の観念だったのである。どのような支配者も、被支配者の利益を無視しては、支配を永く維持することもできないし、自己の利益をはかることもできないであろう。

〈文章II〉

個が全体に反逆するとき、全体は個を排除する。逆に、全体はそのような力を保留しておくことによつて、個を全体に引き寄せておこうとする。全体には、そういう全体の意志を守る求心力が必要なのである。この求心力が権力であつて、正義はこれによつて守られる。国家権力が、強制力としての物理力、一種の暴力をもつのは、権力の源泉が、この共同体の全体意志にあるからであり、それがこの暴力の正当性根拠である。正当化された暴力は、共同体の最後の力であり、共同体のハガネである。その意味では、国家のもつ力は、一種の暴力であつたとしても、倫理化された暴力なのである。なぜなら、それは共同体の秩序にかかわっているからである。実際、物理力は憲法によって保証され、憲法は自然法や慣習法によつて保証され、最後には正義によって保証されている。警察や軍隊は、その

現実化である。そういう点では、第二次大戦後の我が国の知識層を支配した国家権力悪玉説、一種の国家暴力説は、皮相な考えだったと言わねばならない。

しかし、だからといって、国家は、そのような正当性根拠を隠れ蓑みかにして、権力を濫用し、横暴を極めればよいというものではない。それでは、かえって、全体と個の調和は、逆の意味で維持されていないということになる。一面、個なくして全体はありえないのだから、個の正当かつ合法的自由は、あくまでも保障されていなければならない。そうでなければ、全体と個の調和つまり正義は実現されないであろう。国民がみな国家の囚人のようにされてしまったら、これもまた、国家は均衡をもった正当な共同体とは言えない。物理力や強制力は、どこまでも正義によって基礎づけられていなければならないのであって、この正義には、また、個のために全体が働き、個の自由と安全を保障するという義務が含まれていたからである。確かに、正義は力によって保証されなければならないが、力もまた逆に正義によって保証されなければならないのである。正義なき力や、正義を偽装した力は危険である。

（〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉はともに、小林道憲『現代とはどのような時代なのか——現代文明論の試み——』による。）

なお、本文中に一部省略したところがある。）

問1 次の一文は、〈文章I〉の（Ⅰ）～（Ⅴ）のうち、どの部分に補うことができるか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

13

一方だけではなく、両方の呼応が必要なのである。

- ①（Ⅰ） ②（Ⅱ） ③（Ⅲ） ④（Ⅳ） ⑤（Ⅴ）

問2 傍線部A「全体と個の相互の自己否定関係」とあるが、これはどういう関係か。その説明と

して最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

14

- ① 個人の自由よりあくまでも国家全体の利害を優先するという政治的な関係。
② 国家が存在する根拠を個人の尊厳に求める政治思想に基づいた関係。
③ 個人が共同体に奉仕し、共同体が個人に奉仕するという互恵的な関係。
④ 社会という全体が、それを構成する部分である個人の総和に勝るといふ関係。
⑤ 個は全体を、全体は個を、互いに否定し合いながら成り立っている関係。

問3 傍線部B「このプラトンの定義した正義についての考え」とあるが、この考えは、当初のプ

ラトンの考え方と同じものであるか異なるものであるか。当初の考え方と同じであれば①を選び、異なるならばどのようにな変わったのか、その説明として最も適当なものを、②～⑤の中から一つ選びなさい。

15

- ① 当初の考え方と同じである。
② 正義とは支配者側の利益のために支配者が決めるものであるという考えから、国家の欲望的部分を統治者が理性的に抑制し、被支配者の利益のために支配者が実現すべきものであるという考えに変わった。
③ 正義とは支配者のために被支配者が守るべきものという考えから、統治者がそれぞれの節制、勇気、智慧などの徳を發揮しながら、被支配者のために全体としての徳を実現するものという考えに変わった。
④ 国家における調和と秩序をつくりだすために、支配者は被支配者の利益を守ろうと働くという考えから、全体と個の均衡によってはじめて正義という全体の調和がもたらされるといふ考えに変わった。
⑤ 支配者も被支配者の利益のために働くのが正義だという考えから、被支配者が各自で徳を發揮できるように支配者が配慮することで全体としての調和がもたらされるのが正義だという考えに変わった。

問4

傍線部C「ものごとの本来的定義と現実とを混同する」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- ① 国家の維持のためには共同体の秩序と調和が不可欠で、自由主義であろうが民主主義であろうが、国家主義であろうが共産主義であろうが、共同体の調和と秩序を守るべきであるという現実が変わらないと考えること。
- ② 正義は支配者や国家を正当化するイデオロギーであるという考えは、共同体を成り立たせるためにあるべき法や正義の普遍の観念を見落とし、被支配者が抑圧されているという現実の一側面からのみ導かれたものだということ。
- ③ 一つの時代も、全体と個の均衡によつて共同体の調和と秩序がつくられるという本来的定義は普遍のもので、人民の利益をないがしろにしよつとする支配者には、過去そのような者は革命や暴動で打倒されたという現実が立ちはだかること。
- ④ 法や正義は支配者の利益をはかるためだけのものではなく、国民の自由と平等と財産を守るためにも存在しているため、その国民の権利を侵害すれば、どんな支配者であっても支配を永く維持することはできないと考えること。
- ⑤ 支配者であれ民衆であれ、その時代に正義とされている権威あるイデオロギーによつて自らを正当化するのが人間の本質であり、支配者が法や正義を都合よく運用するのは現実的な統治のためにやむをえないとすること。

問5

傍線部D「正義は力によって保証されていないが、力もまた逆に正義によって保証されていなければならない」とあるが、このことについて考えるために、〈文章I〉にも着目して次の〈メモ〉のようにまとめた。〈メモ〉の空欄 X ・ Y に入る表現として最も適当なものを、後の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

X 17 ・ Y 18

〈メモ〉

着目した箇所

「国民に対して、種々の人倫に反した事、例えば殺人や窃盗や詐欺や暴行などを禁じ、これに違反したときには、権力によって処罰することができるとしており、また、公務に当たる者には、権力の濫用や汚職を禁じている」

←
 ・ 国家が、犯罪者を警察力によって取り締まり、法で裁き、強制力によって監禁することができるのは、 X ため。

⇐ 正義は力によって保証されていなければならない。

・ 公務に当たる者が権力の濫用を禁じられているのは、国民個々の安全と自由が保障されなければならないため。

⇐ 力もまた逆に正義によって保証されていなければならない。

全体は力によつて個の正義を保障することで個に対する求心力を得、個は全体が正義に基づいた力を行使する限りにおいて全体が力を持つことを認める。この Y を源泉として権力の正当性は保証され、共同体の秩序と調和は維持されている。

空欄 X

- ① 国家の力が倫理化された暴力である
- ② 国家に権力が与えられている
- ③ 法が正義の番人である
- ④ 正義を守るには不可欠である

空欄 Y

- ① 個の合法的自由
- ② 公的な主体
- ③ 国家を構成する国民の義務
- ④ 共同体の全体意志

問6

高校生五人が〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉を読んで話し合った。〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉の内容を踏まえた発言として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

19

- ① 生徒A…〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉で話題にしている「正義」とは、共同体の正義なんだね。善／悪という個人の倫理観の基準は、ここでは問題にしているということだ。
- ② 生徒B…個人の倫理観としての正義が全体のためにならないものであれば、その正義には根拠がないんだよ。だから共同体の秩序を乱せば法によって裁かれるんだ。
- ③ 生徒C…国家は権力を行使することを共同体によって保証されているから、共同体の秩序を守るためなら、個人の自由を顧みなくても許されるんだね。
- ④ 生徒D…個人が自分勝手な正義感で誰かを傷つけ、共同体の秩序を破壊しようとするれば、共同体の秩序を守ろうとする意志が強制力となって働くんだね。
- ⑤ 生徒E…その一方で正義なき力や、正義を偽装した力は、共同体やその構成員に調和をもたらしものではないから危険であると、筆者は述べているんだね。

3

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

十三歳のおあやは、三年前に母を亡くし、貧乏なのに気前のよい父にわだかまりを感じつつ、父と弟の正太と三人で、長屋で暮らしている。同じ長屋の店子（住人）である重蔵が滞納した店賃（家賃）を父が肩代わりすることになり、父に言いつかって、長屋を管理する差配である新兵衛の家を正太とともに訪れ、新兵衛の孫娘のお美代に店賃を渡した。

「あの、差配さんは――」

振り返ったお美代は訝しげに眉をひそめている。

「具合が悪いんですよね」

半月以上も姿を見ないのは、そうとしか考えられなかった。

お美代は小さく息を吐き、

「上がって顔を見ていったら」

素っ気無い口調で言った。

「いいんですか」

「ええ。だいぶよくなつたから」

これもまた冷たいくらいの物言いだつたが、どうぞ、と促してくれた。

土間からすぐの四畳ほどの板間を抜ける。広々とした居間の先には六畳間があり、新兵衛が横になつていた。枕元には暇つぶしに読んでいたのか、本が二冊置いてある。題名の「八犬」という字だけが読めた。八頭の犬が出てくるお話だろうか。

「ああ、おあやちゃんに正坊」

よく来たね、と新兵衛が嬉しそうに言った。

勧められるまま、正太と並んで枕元に座ると、ヨモギに似た薬のにおいがふんと立ち上った。顔色はいい。いや、むしろ以前会ったときよりもふっくらしている気がする。

「どこが悪いんですか」

「腰を痛めたんだ」

湿布のにおいだったか。

「内側の病ではないから案じることはないが、歳が歳だからねえ。まあ、日にち棄たあね」

新兵衛はころりと笑った。

「起き上がれないのかい」

気の毒そうに正太が眉をひそめる。

「いや、起き上がれるさ。お美代、支えてくれ」

新兵衛が言い終わらぬうちに、お美代は素早くおあやたちの反対側に回って片膝をついた。力を入れているからか頬にはほんのりと血の色が上り、そこに長い睫が淡い影を作っていた。

半身を起こした新兵衛は孫娘へ礼を述べた後、

「おあやちゃんたちに菓子でも出してやれ」

台所のほうを顎でしゃくった。お美代は黙って頷くと静かに立ち上がった。

途端に新兵衛が声をひそめる。

「あれと（注）お楽さんが揉めたらしいねえ」

その物言いから、お美代本人ではなく他の人から聞いたのだと察せられた。

はい、とも言えずにおあやが黙っていると、

「だんまりが答えてやつだな」

苦笑した後、新兵衛は言葉を継いだ。

「あれもお楽さんと同じで気が強いからな。確かに重蔵さんにはこつちも頭を痛めてたんだ。だが、差配人が店賃を肩代わりするのは他の店子の手前もあつてできないからね。まあ、だからと言っておあやちゃんのおとつあんが助けるのも筋が違うがな。おあやちゃんのところもそれほど楽じゃないだろう」

A これにも返答できずにおあやは俯うつむいた。正太は意味がわかっているのかいないのか、ただ黙って話を聞いている。

沈黙が深くなると、やたらと台所の物音が気になってしまう。菓子だけでなく茶も淹ひれているのだろうか。いや、自分のことが話題になっていると知っていて、ゆっくりしているのかもしれない。おあやがそわそわしていると、

「あれはあれで何か考えがあつたんだと思うんだが。ちとやりすぎちまつたかな」

新兵衛は小さな目を細め、台所のほうをちらりと見た。

考えって何ですか——

訊きねようとしたところへ、床を打つ足音がしてお美代が戻ってきた。

「これしかないけど。おしまさんのところで大福餅でも買っておけばよかつたわね」

やはり淡々とした物言い、番茶と菓子鉢に載った煎餅を出してくれる。

おしまさん、とは表店で菓子屋を営む老女のことだ。五年前に連れ合いをなくしたが、その後もひとりで元気に商いを続けており、〈おしま婆ばあさんの大福餅〉と言えば、午過ひるぎには売り切れてしまうほどの人気である。

——おあや。おしま婆さんのところへ行こう。早くしないと売り切れちゃうから。

生前の母はおあやと正太を連れて時折、大福餅を買いにおしま婆さんの店へ行つた。買うのは必ず五つ。うちは四人なのに、どうして五つも買うの。

——ここの大福餅、おとつあんが好きだから。
とろけるような顔をして母は答えた。

でも、母が死んでからおあやはおしま婆さんの大福餅を食べたことはない。すぐに売り切れてしまふ菓子をわざわざ買っていく心のゆとりも注おあしの余裕もないし、何よりひとりで店に行つても楽しくない。おとつあんが好きだから。そう言つて笑う母の嬉うれしそうな顔を見るのが、おあやも嬉しかったのだ。

たった大福ひとつなのに、こんなにも母との思い出が詰まっている。

B 母が死んでからの三年間、自分はいったい何をして生きてきたのだろう。

おあやはまだ嫌な重みが残る胸に思わず手を当てた。

あたしの中うちにいるのは注鬼の子じゃない。

これは——空っぽの重みだ。

手習所てならいばに行けなくなつて、美味しいお菓子も口にしなくなつて、母の笑顔も見られなくなつて、たくさんの楽しいことが淡雪のように消えてしまった。それなのに、母の死を悲しむ間もなく暮らして追われ、毎日お金のことばかり考えなくちゃいけなくなつた。

中身がないのにずしりと重いもの。そんな空っぽの重みをいつも胸に抱えているから、ほんの少しのことで〈むかむか〉したり〈べそべそ〉したりしてしまう。

ほら、今も。たかが大福餅のことなのに、厄介な〈べそべそ〉が襲ってくる。おあやはそれをぎゅ

つと固めて胸奥へと押し込んだ。

「どうしたい？ おあやちゃん」

新兵衛の案じ声がした。

「姉ちゃん——」

正太の手が不安そうに袂を掴む。

大丈夫——そう言おうと思うのに喉が詰まって声が出せない。

「おあやちゃんは、子どもなんだから」

凜とした声はお美代のものだった。

おあやがおずおずと顔を上げると、なぜかお美代まで泣き出しそうな面持ちをしていた。その頬がさらに歪む。

「子どもなんだから、つらいときは泣かなくちゃ駄目。泣かなきゃ、心がねじ曲がっちゃう」

——いくら器量よしでも、性根がひん曲がってたら女は駄目ってことだよ。

この人も。母に似ている美しい人も。泣くのを我慢したから、心がねじ曲がっちゃったのだろうか。そう思った途端、凝っていた「へそへそ」がほどけてばらばらになった。いけない、と思う間もなく涙がこぼれ落ち、次々と頬を伝う。こらえようと思えば思うほど涙は止まらず、抑えようと思えば思うほどに胸や背中がわなないた。

やがて、その背に手がそっと触れた。温かく柔らかな手だった。大丈夫だよ、と手は囁くように優しくさすってくれる。そのたびに胸奥の嫌な重みが少しずつ軽くなっていく。

もしも、このまま泣くのを我慢していたら。

嫌な重みで、心がねじ曲がってしまったかもしれない——

表に出ると春の陽は沈んでいた。西空だけが残照で仄かに明るく、辺りには夕方とも夜とも言えぬ薄青い闇が漂っている。甘いにおいのする春の風に頬を撫でられると、泣いたばかりの目が少しだけひりひりした。

「なあ。姉ちゃん。お煎餅、美味しかったな」

どこか大人びた口調で正太が言う。

「うん。美味しかった」

おあやがひとしきり泣いてから、食べると元気になるよ、とお美代が煎餅を渡してくれた。ザラメをまぶした煎餅は甘いのにしょっぱくて不思議な味だった。こんな美味い煎餅を食べるのは初めてだと正太は二枚も食べたので、気に入ったら持っていきなさいとお美代が懐紙に包んでくれた。

「明日も、煎餅食べていい？」

言いながら正太が手をつないできた。いつものように甘える一方ではなく、おあやを慰めるような、励ますような手のつなぎ方だった。弟のくせにと思えば、おあやの胸の中では嬉しさと恥ずかしさと悔しさが一斉に頭をもたげる。

「何よ。あんたの手、ザラメでべたべたじゃない」

そのせいか、慳貪な物言いになってしまった。

「へん。姉ちゃんの手だってべたべただよ」

べたべた姉ちゃん、と憎まれ口を叩いていながらおあやの手をぎゅっと握りしめる。お返しとばかりにおあやも正太の手を握り返してやる。

べたべた正太。べたべた姉ちゃん。べたべた。べたべた。

C けらけらと笑いながら手を振って歩いていくうち、藍闇に半纏姿の父がぼんやりと立っているのが見えた。

二人に気づくと、父は裏店の端から端まで響き渡るほどの大声で怒鳴りつけた。

「おい、どこに行ってたんだ。誰もいねえから、心配しちまったじゃねえか」

「おとつあん、お帰り」

父親の大声なんぞ慣れっこなのか、正太はおあやの手を離すとたくましい腕に飛びついた。父は父で、相好を崩し、ぎゅっと抱いてやってから正太の顔を覗き込む。

「何だい、おめえの手はべたべたじゃねえか。どこで何してきたんだ」

「あのね。差配さんの家に行ってきたんだ。ザラメの煎餅をもらったんだよ」

「そうか。そりゃよかったな。けど、その手はちゃんと洗えよ」

父は正太の頭を撫でた後、おあやに向かってほつりと言った。

「すまねえな」

重蔵の店賃を届けにいったと察したのだろう。その目が何だか潤んで見えておあやは慌ててかぶりを振った。

今日は父にも寛大になれる。このところ、ずっと胸の中にあった〈むかむか〉や〈べそべそ〉は涙でしっかり洗い流してきたからだ。

もしまた自分が嫌になりそうだったら――

そのときは泣けばいい。背中に残る温かい手を思い出しながら、おあやは井戸の水を汲んだ。冷たい水に正太と一緒に手を浸すと、微かに甘さの残る唇をそっと舐めた。

(麻宮好『月のうらがわ』祥伝社による。)

(注) 1 お楽さん――長屋の店子。

2 おあし――代金。

3 鬼の子――お楽がお美代のことを、重蔵に対する態度の厳しさを非難する意味で、人の子ではなく「鬼の子」だと言った。それを聞いたおあやは、〈むかむか〉を感じたときに自分の中に「鬼の子」がいるのではないかと思った。

問1

傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

20、21、22

(ア) 凝っていた

20

- ① ほぐれかけていた
- ② 疑問が残っていた
- ③ 意地を張っていた
- ④ 必死に守っていた
- ⑤ わだかまっていた

(イ) 慳貪な

21

- ① とげとげしい
- ② とりすました
- ③ うちとけない
- ④ 甘えたような
- ⑤ つまらない

(ウ) 相好を崩し

22

- ① 姿勢を低くして
- ② 大声で笑って
- ③ 嬉しそうな顔になって
- ④ 厳しい表情で
- ⑤ 戸惑った様子で

問2

傍線部A「これにも返答できずにおあやは俯いた。」とあるが、おあやはなぜ俯いたのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 新兵衛のところへは父の言いつけでお金を持って来ただけで、家計の状況について答えられるほど詳しくは知らなかったから。
- ② おあやが苦勞して生活を回している状態でも、人の店賃を肩代わりしようとする父の善意をけなされて猛烈に腹が立っていたから。
- ③ 差配という地位にある新兵衛に「筋が違う」とたしなめられたことに萎縮し、これ以上新兵衛の機嫌を損ねることを恐れたから。
- ④ まだ幼いおあやには周囲の大人の事情が理解できておらず、新兵衛にどう返答をしたらいいのかわからなかったから。
- ⑤ 新兵衛の言う通り、おあやの家に金銭的な余裕はないが、正直に答えることも嘘をつくこともはばかられたから。

問3

傍線部B「母が死んでからの三年間、自分はいったい何をして生きてきたのだろう。」とあるが、このときのおあやの様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① おしま婆さんの大福餅と聞いて、「おとつあんが好きだから」と笑っていた母の笑顔を思い出し、こんなにも母が好きだった父に対して不満を抱いている今の自分を母が叱っているようで、胸が痛くなっている。
- ② 母の死を悲しむ間もなく暮らしに追われ、ただただ毎日お金のことばかり考えて、お菓子を買いに行く心のゆとりさえ失っている自分をはたと顧みて、何のために生きているのだろうと、自問自答している。
- ③ 大好きだった母を失ったうえに、たくさんの楽しいことがなくなってしまい、胸にぽっかり空いた大きな穴の中に、生活の苦労で生まれた悲しみや怒りが積み重なっていくつらさを、自分でも持て余している。
- ④ 暮らしに追われて心のゆとりがなくなり、父が好きな大福餅を母の代わりに買いに行くこともしなかったことに気づき、妻を失った悲しみの中にいる父に、この三年間何もしてあげなかったことを後悔している。
- ⑤ たった大福ひとつでも生前の母の姿をありありと思い出せるのに、これまで母の死を認めたくなくて母のことを考えないようにしてきたことが、かえって母をないがしろにする行為だったと反省している。

問4

傍線部C「けらけらと笑いながら手を振って歩いている」とあるが、このときのおあやの様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

25

- ① 出された煎餅を二枚も食べ、べたべたになった手でおあやの手を握ってきた正太が、いつもより大人びた様子であることに気づいて、かわいい弟の成長が喜ばしく、気分が高揚している様子。
- ② 重蔵の店賃を新兵衛に届け終えて、父からの頼まれ事を無事済ませることができてほっとしたところへ、明日も煎餅を食べてもいいかと聞く正太のあどけなさに、いつそう心が軽くなっている様子。
- ③ 憎まれ口を叩きながらもおあやの手をしっかりと握ってくる弟の掌てのひらのぬくもりから、おあやが泣いたことに正太が小さな胸を痛めていることが伝わってきたため、心配させまいと気を張っている様子。
- ④ 泣いてしまった自分を励まそうとする正太を生意気と思いつつも、そんな弟の気遣いが嬉しくもあり、胸のつかえもとれたことですっかり気持ちが落ち着き、弟とともに朗らかになっている様子。
- ⑤ いつも甘えてばかりの正太が自分を慰めるようなことを言うので、おあやの中で膨らんできた恥ずかしさや悔しさを振り払うために、あえて自分も子どものように正太とじゃれ合っている様子。

問5

傍線部D「微かに甘さの残る唇をそつと舐めた」とあるが、このときのおあやの心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

26

- ① お美代がくれた煎餅の甘さと、流した涙のしょっぱさが残る唇を舐めながら、これまで我慢してきたいろいろのことが報われたような気持ちがしている。
- ② つらいときは泣いてもいいと言ってくれたお美代の優しさや、背中を撫でてくれた手の温もりに励まされ、これからの暮らしに前向きになっている。
- ③ このところずっと胸の中にあつた〈むかむか〉や〈せせせ〉がすっかり消えていることを確認し、これからは父にも寛大になれると胸を撫でおろしている。
- ④ 母が亡くなつてから、一度も泣くことができなかつたが、ようやく心にたまったものを吐き出すことができ、これからも頑張ろうと決意を新たにしている。
- ⑤ 冷たい水に触れたことで、背中を撫でてくれたお美代の手の温かさが消えそうになり、ザラメの甘さにすがって今日のことを忘れないでいようと思つている。

問6

この文章で描かれている人物について説明したものと**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

27

- ① 新兵衛は、お菓子を出してやるようお美代に命じる子ども好きの一面がありつつも、おあやを子どもと侮らず差配として言うべきことを言う人物である。
- ② お美代は気が強く、ぶつきらぼうでひねくれたところがあるが、おあやのつらさに気がついて、心の重荷を下ろさせてくれる優しさを秘めた人物である。
- ③ 正太はまだ幼く、美味しい煎餅をもらつて無邪気に喜びを表すが、人目もはばからず泣く姉を見て、姉に甘えるだけでなく姉の支えになろうともしている。
- ④ 父は夕方になつても帰らない子どもたちを心配して家の前で待つほど子煩悩だが、自分たちの暮らしよりも人情を優先する江戸っ子堅気かたぎの人物である。
- ⑤ おあやは亡くなった母の代わりに家計を切り盛りするしつかり者だが、我慢強いあまり心の中に鬼の子を飼うようになり、情緒不安定になっている。